

## C | 造本装幀コンクール展

### ❖ 造本装幀コンクール展のあゆみ

書協と日印産連が主催する造本装幀コンクール展(以下、本コンクール展)は、2006年(平成18)に第40回を迎えた。このコンクールは毎年開催され、その前年の1年間に発行された書籍で出版社、印刷・製本会社、デザイナーなどの個人から応募があったものを12部門に分類し、本文の文字組、色使い、レイアウト、表紙カバーの美しさ、機能性、材料の適性、印刷、製本などの観点からの審査を行い、授賞作品を選考している。

本コンクール展は、1966年(昭和41)に第1回が開催された。このときは、紙上展として開催されており、現在の形に近いものになったのは、69年の第4回からである。この年に初めて、文部大臣、通商産業大臣、東京都教育委員会の3賞が定められ、そのほかに金・銀・銅の入賞作63点が選ばれた。当時は、書協、日本印刷工業会、全国製本組合連合会の3者によって主催され、運営事務局は(株)印刷時報社<sup>7</sup>が担当した。一般公開は渋谷・東急百貨店東横店を第一会場、科学技術館を第二会場として、10月31日から11月5日に行われた。

71年からは、部門別の日本書籍出版協会会長賞、全国製本組合連合会賞の主催者団体賞が制定され、さらに後援団体である読書推進運動協議会、ユネスコ東京出版センター、日本写真製版工業組合連合会、東京ビニール加工紙協同組合がそれぞれの賞を授与した。72年の第7回からは、主催者団体賞として、書協会長賞<sup>8</sup>10点、全日本製本工業組合連合会会長賞5点に加え、日本印刷工業会会長賞が新設され、6点に授与した。また、日本図書館協会とユネスコ東京出版センターが発展して設立されたユネスコ・アジア文化センターが後援団体に加わり、それぞれの賞を授与した。さらに、85年の第20回から、主催団体のうち、日本印刷工業会が日本印刷産業連合会に代わり、出版文化国際交流会が新たに後援団体となった<sup>9</sup>。

92年(平成4)からは、東京国際ブックフェアが毎年開催となったこともあり、同フェア会場に全応募作品を展示するスペースを設けることとした。

7——1994年(平成6)から、事務局は株印刷出版研究所に交代した。

8——書協の役員組織の変更にもない、78年(第13回)からは、「理事長賞」に変更された。

9——全日本製本工業組合連合会は、86年までは主催団体になっていたが、87年からは日印産連に一本化された。



第41回造本装幀コンクール展受賞作品。左から東京都知事賞の『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』(エスクァイア マガジン), 文部科学大臣賞の『おかしな二人組(スード・カップル) 三部作』(講談社), 経済産業大臣賞の『江戸鳥類大図鑑』(平凡社)。

### ❖「世界で最も美しい本」展での受賞

コンクール展の入賞作品は、1970年(昭和45)以降、東ドイツ(当時)のライプチヒで開催される「世界で最も美しい本」国際コンクール<sup>10</sup>に出品された。

この展覧会は、1963年、当時の東ドイツ書籍業組合の主催で始められた。70年に、日本から初めて第4回造本装幀コンクール展の入賞作品を出品し、そのうち『東大寺』(岩波書店)が金賞を、また『いけばな』(美術出版社), 『現代日本の住宅』(彰国社), 『岩波講座 基礎科学』(岩波書店), 『国宝 彫像』(トッパン), 『竹あみ』(淡交社)がそれぞれ銀賞を獲得した。

90年(平成2)東西ドイツの統一により、これ以降「世界で最も美しい本展」はドイツ書籍業組合、ドイツ国立図書館、フランクフルト市、ライプチヒ市、ヘッセン州などによって設立されたドイツ・ブックアート財団<sup>11</sup>が運営を引き継ぎ現在に至っている。

審査会は毎年2月中旬にライプチヒで開催され、受賞作品は3月下旬から4日間の会期で開催されるライプチヒ・ブックフェアに展示され、その後、10月のフランクフルト・ブックフェアでも展示される。展示会終了後には、全出品作品はドイツ国立図書館が管理するドイツ書籍美術館<sup>12</sup>に寄贈される。

日本からの出展作品(本コンクール展の受賞作)には、毎回非常に高い評価が与えられており、最高賞である金の活字賞(The Golden Letters)は、82年の『伝真言院両界曼荼羅』(平凡社), 90年の『年鑑日本のグラフィック1989』(講談社), 2005年の『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』(近代印刷活字文化保存会)がそれぞれ受賞したほか、金賞以下の諸賞も多数受賞している。

### ❖より社会に開かれたコンクールに

本コンクール展は、造本装幀に関する数少ないコンクールとして定着したが、一方で出版業界内部の催しとみられ、社会的に注目されることが少なくなっていた。また、

審査員の固定化もありマンネリとの批判もなされるようになった。

このため、2000年代に入ると本展を改革して、より社会に開かれたコンクールにし、かつ装幀の「現在」を表現している若手装幀家の作品が応募してくるようなものに育てていこうとの機運が高まってきた。その結果、第37回にあたる2002年(平成14)に、3賞の審査方法を変更し、審査員を一新した。新しい審査員としてはデザイナー・装幀家の菊地信義、中垣信夫、学識経験者では柏木博(武蔵野美術大学教授)の各氏に依頼し、従来から読者代表として審査員を務めていた児玉清氏と主催者代表の書協および日印産連の両団体専務理事を加えた7名によって3賞選考会を構成して、文部科学大臣賞、経済産業大臣賞、東京都知事賞および審査委員奨励賞の選考にあたることとした。

また、03年からは3賞選考会に印刷・製本の専門家をアドバイザーとして加え、さらに07年からは、主催者代表の書協、日印産連が3賞選考会から降りて、新たに浜田桂子氏(絵本作家)を審査員に迎えるなど、審査会の充実・改善を進めた。

本コンクール展は06年に第40回を迎えたが、「東京国際ブックフェア2006」における授賞式では、05年に「世界で最も美しい本」国際コンクールの最優秀賞受賞の『日本の近代活字』のデザイナーである勝井三雄氏の記念講演会を実施した。また、40回記念として印刷博物館において、「日本とドイツの美しい本2005—『第40回記念造本装幀コンクール』と『ドイツの最も美しい本2005』」が開催された。

なお、書協では本コンクール展の運営を生産委員会が担当してきたが、03年からは造本装幀が読書推進に果たす役割を重視し、読書推進委員会も実行委員会(主催者・後援団体で構成)に加わっている。

---

10 — International Competition of “Best Designed Books from All Over the World”

11 — Die Stiftung Buchkunst in Frankfurt am Main and Leipzig

12 — German Book and Type Museum